

「文楽鑑賞教室参観会」

2019年12月6日（金）実施 JGA 第一支部研修終了レポート

12月6日（金）11:00～13:22、国立劇場小劇場にてJGA 第一支部主催による「文楽鑑賞教室参観会」が開催されました。参加人数は25名（JGA 正会員21名、非会員3名、運営委員1名）でした。

今回は、国立劇場主催の文楽鑑賞教室のチケットを団体としてJGAが一括して手配し、文楽の演目を楽しむと共に、幕間の文楽解説で文楽についての詳しい説明を聞くことが出来ました。尚、鑑賞後は自由解散としました。

鑑賞内容として、一幕目は11:00～11:15で「伊達娘恋緋鹿子（だてむすめこいのひがこ）」、二幕目は「平家女譲島（へいけによごじま）」鬼界が島の段で、一幕と二幕の間に文楽についての解説がありました。

解説によると台詞を言う太夫（たゆう）は1人で登場人物全ての声を使い分けるとのことで、特に女性と男性の声の使い分けや喜怒哀楽の表現の仕方は見事でした。また、三味線の音色も太夫の表現する喜怒哀楽によりすべて異なり、太夫の台詞と三味線、人形の動きの息が合っはじめて感動が生まれることや、人形も三人で操られており、台詞、三味線に合わせて色々な表情を表すのは至難の業であることが良く理解できます。そうした日本人の器用さは文楽、歌舞伎、能、狂言といった伝統芸能以外にも蒔絵や螺鈿、寄木造等の工芸品や建築等にも生かされており、改めて日本人のきめの細かさを感じ取ることが出来ました。

一幕目の「伊達娘恋緋鹿子（だてむすめこいのひがこ）」は八百屋お七を題材にした代表作の一つで、クライマックスのお七が火あぶりの刑を覚悟の上で恋人の吉三郎の為に偽りの半鐘を鳴らそうとする場面は見事でした。

二幕目の「平家女譲島」鬼界が島の段では、鹿ヶ谷の陰謀が発覚し、鬼界が島に流刑となった俊寛、康頼、藤原成経と成経と恋仲になった海女の千鳥の関係と、島に赦免状を携えて来た赦免使達及び赦免状に書かれた内容にまつわる物語で、人の複雑な感情を見事に表現した演目でした。

上演中は台詞が現代語とは異なっている為、舞台の上部に字幕スーパーが流れ、内容も理解しやすくなっており、初心者でも充分楽しめるようになっていました。直接ガイドする機会は少ないかも知れませんが、通訳案内士として日本文化を理解するには貴重な経験だったと思われまます。